

深イ～話！

No.72

——シンガーソングライター・心理カウンセラー南修治 福岡市での講演より——

マイクの前に立ったF君はお礼の言葉を述べ始めました。が、案の定、言葉が詰まって声が出ません。原稿を読んでいるのですが、途中、何度も何度も詰まるんです。

長い時間をかけ、ようやく最後まで読み切りました。会場からは、割れんばかりの拍手が起こりました。「F君、よくやった！感動した！」そんな気持ちが伝わってくる拍手でした。

控え室に戻って、僕は彼と話をしました。一体何が彼をこんなにまで勇気づけたのか。彼の希望は一体何なのか。それを知りたいと思ったのです。

彼のお母さんは彼が生まれてまもなく亡くなっていました。

彼は、お母さんの顔も知らないし、お母さんに抱っこされた経験もありません。そんな不安定な環境の中で吃音障きつおんがいになったのかもしれない。

しかし、そんな彼の事情を知らない周りの子は、彼の吃音障がいを茶化し、いじめていました。「何で僕にはお母さんがいないんだろう。何で僕は吃音障がいなんかになったんだろう。」と彼はずっと自分の人生を嘆いていました。

そして、投げやりな気持ちになり、不登校気味になっていきました。

ある日、父親にこんなことを言いました。「僕なんて生まれてこなければよかったんだ！」それを聞いて、お父さんはある決断をしました。「お母さんがどんな希望を持ってこの子を送り出したのか、それを伝えよう」と。

お母さんには重い内臓の病気がありました。「助かる道は移植しかありません」お医者さんからそう言われていたそうです。

そんなお母さんに一つの命が宿りました。そのとき、お医者さんはこう言いました。

「今の医学では、あなたが子どもを産むということには大きなリスクがあります。」

親戚の人はこう言ったそうです。「あなたに出産や子育てなんて無理。おろしたほうがいい。」

お母さんはどれほど悩んだことでしょう。でもお母さんは厳しい道をあえて選び取ったのです。

「産む」という道を選択したお母さんは、すぐに入院をし、最先端の医療を求めて、母子共に助かる道を模索していきました。

しかし、そんな努力が実らないまま無情にも時は過ぎ、お母さんの症状は悪化し、昏睡状態になりました。「このままでは母子共に危ない」ということで、お母さんの想いを優先し、1人の男の子が未熟児としてこの地上に誕生しました。それが、彼でした。

お母さんは、あれほど待ち望んだ我が子の姿を一度も目にすることなく、出産後、天国に帰っていかれたのです。F君はその話を初めて聞きました。それまで、「お母さんは病気で亡くなった」ということしか伝えられていなかったのが、「お母さんは、自分の命を投げ打って自分を産んでくれた」という真実を知って彼は衝撃を受けたのです。

まだ中学生の彼がその重たい真実を受け止めきれぬかどうか分からないけど、彼の悩みを少しでも軽くできればと思って、お父さんは伝えようと決断したのです。

F君は、お父さんの話を聞いた後、一目散に仏壇の前に駆けて行き、こう叫んだそうです。

「ありがとう、お母さん！僕は何のために生まれてきたのか、やっとわかった！これからはお母さんのように生きる！」

これが、F君が一番苦手な、「大勢の人の前でお礼を述べる」と決断をした理由だったのです。